

## 第三章 そばの伝播・伝来

### 一 そばの中国への伝播

そばはタデ科に属するため、禾本科の作物とはその形態や性質をいちじるしく異にしているけれども、マーケットでは「つまり、用途を同じくするので通常「禾穀(かこく)」「とか「穀物(こくもつ)」「あるいは「穀類(こくるい)」「として、その中にそばを含め、いわゆる取引が行なわれているのである。

すなわち、「この事情は世界的にも共通で、英語のシリアル(Cereal)、「ドイツ語のゲトライデ(Getreide)に相当する言葉である。また、もっと身近かに表現する場合には、いわゆる「穀粒(こくりゅう)」「とも言うのであるが、英語でもこれに相当する言葉としてグレイン(Grain=主にアメリカで使われる)、「あるいはコーン(Corn=主にイギリスで使われる)、「ドイツ語ではコルン(Korn)が使われている。

しかし、穀粒の王座は東洋では何と云っても「コメ」であり、ヨーロッパ諸国では、「コムギ」である。いま、アメリカでは穀粒(グレイン)の生産が世界一であるが、アメリカではグレインをフード・グレイン(Food grains)、「フィード・グレイン(Feed grains)の二つに分けている。つまり、フードは「人が食べるもので、言わば能動的(?)なもの、フィードは(家畜に)食わせるもので言わば受動的(?)なものというようになる。

そして、前者にコムギ(Wheat)、「ライ麦(Rye)、「コメ(Rice)、「ソバ(Buckwheat)の四作物を、後者にトウモロコシ(Corn)、「エンバク(Oats)、「オオムギ(Barley)、「ソルガム(Sorghams)の四作物をそれぞれ含ませているのである。

ともかく、このようにそばは、「イネ(コメ)やムギなどと肩を並べて人類の胃袋をみたしてきた重要な作物の一つであることは間違いないところである。

さて中国本土は、そばの原産地に近接または近いとされているだけに、伝播はきわめて古いはずであるが、古文獻にはその記載がなく、南北朝時代に北朝の一つとして、華北を統一し、南朝の宋(そ)と対立していた北魏(ほくぎ)王朝(三八六年〜五三四年)の末年に、賈思(かしきよう)という人が著述した『齊民要術(せいみんようじゆつ)』という農業技術書があり、これがそばに関する世界最古の記事であるところ。

すなわち、同書の巻頭の「雑説」の条にそばの耕作と収穫法が書かれているのである。つぎにその訳文をかかげてみよう。

「およそ蕎麦をつくるには五月に畑を耕す。三五日すると埋めた草が腐るので耕耘(うん)して播(は)種(たね)することができる。三遍耕して立秋前後の各一〇日のうちに蒔(ま)く。もし三遍耕せば蕎麦も三段に実をつける。下二段の実が黒くなれば、上二段は白くても白汁が充滿してまだ固まっていないうのだから、早速、刈り取り梢と梢をもたせかけて並べておくと、白い子実も日と共に黒く枯れてくる。これが妙法というものである。もし上段の子実が全部黒くなるのを待っておれば、下段の黒い子実はすっかりこぼれ落ちてしまふ。」

しかし、この雑説なるものは『要術』の本文とは、その体裁も文体もいちじるしく異なり、「本文」にはそばの記載が一つもなく、むしろ「雑説」のところで重要視していることなどから、賈(か)氏の原著ではなく後世の付加だろうというのが最近の説である。とは言っても、史料の価値は高く、六世期末から七世紀初頭の話と思って差支えないであろう。

南北朝から、随(ずい)(五八一〜六一八年)、唐(とう)(六一八年〜九〇七年)の時代になると、「本草学(ほんそうがく)」「——薬の本とする草、つまり薬草学という意味だが内容的には動物

や鉱物も含まれる——の分野にもそばの記載がみられ、もっとも古い史料として、孫思(しんにように貌)(そんしげい)が顕慶四年(六五九年)以前に著わしたものとみられる『千金方』の巻二六「食治方」の蕎麦の条に、

酸微寒、食之難消、久食動風、令二人頭眩、作麩和猪羊肉

一、・・・・・

と出ている、そばの食べ方を教え戒めていることがわかるだろう。

そのほか、孫思(しんにように貌)に師事したといわれる名医孟(まへんに先)(もうせん)が晩年に著わした『補養方』(七〇一年〜七〇四年ごろ)という本草の書物に、そばはなるべく多食しない方がよい、ことを記しているのである。そして同書は、後に張(ちやうてい)という人が内容を改訂して『食療本草』の名で広く世に知らわたっているのである。また、北宋の『嘉祐(かゆう)本草』(一〇六一)にはそばの薬効が認めれ、腫物(はれもの)のはれをひくのによいことを記している。

唐時代の中期以後になると、広く、そばが栽培されたようで詩人の吟詠の対象にもなっている。つぎに白楽天(はくらくてん)の有名な「村夜」の詩句をあげよう。

霜草蒼蒼蟲切切

村南村北行人絶

独出門前望野田

月明蕎麦花如雪

霜草(そうそう)は蒼蒼(そうそう)として 虫(むし)は切切(せつせつ)たり

村南(そなん) 村北(そんぼく) 行人(こうじん)絶(た)ゆ

独(ひと)り門前(もんぜん)もんぜんに出(い)でて野田(やでん)を望(を望)のぞめば

月明(つきあき)らかにして 蕎麦(ぎょうぼく)花(は)は雪(ゆき)の如(ごと)し

この詩は、白楽天が、母の死後、長安の西郊渭水(いすい)の北にある郷里の下(ま)まにおおざと(かけい)に帰ったときの作(八一一年)であると伝えられている。最後の「月明らかにして、蕎麦の花が雪のようである」という表現がなんでもないことのように書いて、一瞬、月の中の、白いそばの花が浮きあがり、うつくしくみえるようだ——。

農作物としてのそばのことを書いたものに元(げん)(十三世紀〜十四世紀)の王(わう)示すへんに貞(てい)(おうてい)の『農政全書』がある。同書の蕎麦の条に「北方山後諸郡多種治去皮穀磨為麩焦作煎餅配蒜面食或作湯餅謂之河漏」とあり、すなわち、北方、山西地方の人々はこれをひいて、煎餅にして、蒜(んにく)と一緒に食べたり、あるいは「河漏(かろう)」といって湯餅(すいとん)にもするといっている。河漏の名はここに出てくるのが最初であるという。

このように、そばが中国にいつごろ伝播されたかといことは明確でないが、史料としてはわが国の『続日本紀(ぞくにほんぎ)』の記録より古いものがあり、かなり早い時期に作物として普及したものと考えられる。

## 二 そばの日本への伝来

そばの日本への伝来に関しては、中国から朝鮮半島を経由して導入されたものと推論する説も多いけれども、その時期などについての明確な記録はまだ見当たらないようである。

しかし、安達巖著『たべもの伝来史——縄文から現代まで』(柴田書店刊・昭和五〇年初版)によると、我が国にもっとも古く伝来した穀類として稗(ひえ)(シコクヒエ・粟(あわ)・黍(きび)・蕎麦(そば)・稲(いね)の六つの作物をあげ、約三、〇〇〇年前の縄文(じょうもん)晩期に伝来したものとしている。

甲野勇氏の埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告(昭和三年)によると、泥炭層の遺跡からウリ類・小豆・ゴマなどと同時にソバ粒を検出している。

そのほか、静岡県の登呂遺跡、長崎県の野尻湖、青森県南津軽郡の発掘調査などで、他の作物の種子とともにソバが発見されたことが報告されている。しかし、後世のものが混入した疑いもまったくないとは言いが切れない。ともかく現在、史料的に最古のものは、『続日本紀（ぞくにほんぎ）』巻九の、第四十四代元正（げんしょう）（天皇の養老）（ようろう）（六年）（七十二年）（七月一九日に発せられた勅農（かんろう）の詔（みことり））がそれである。

「今夏無雨、苗稼不登、宜令天下国司勸課百姓、種樹晚禾蕎麦及大小麦、蔵置儲積以備年荒」

すなわち、今年の夏は雨がなく、田からとれるもの（イネのこと）がみのらず、よろしく天下の国司（くにつかさ）（地方官史）をしておおみたから（農家）を勸課（かんか）し、晩禾・蕎麦及び大小麦を植えしめ、たくわえておきいて救荒（きゅうこう）（凶作のときにすくい助ける）に備えしむべし、とのことで、応急策としてそばをつくらせたものである。このように、すでに元正天皇の世に、農民が凶年の「備荒（びこう）作物」または「救荒作物」として、そばを栽培したのは確かである。それ以前にも、あるいはそばが栽培されていたかも知れないが、その年代はよくわからないのである。つまり、当時の古文獻がまだ見つけ出されていないということである。

つぎに、『続日本後紀』には一一七年後の第五十四代仁明（にんみょう）（天皇の承和（じょうわ））（じょうわ）六年（三八九年）正月七日に、

「今三畿内（きない）（国司勸二種蕎麦一、以ア其所レ生土地不レ論二沃瘠（よくぜき）一、播種収穫共在二秋中一、稲（とう）（梁之外足上レ為レ食也）」

ともあつて、そばの栽培をすすめているわけである。

このように、日本では畿内（きない）——山城（やましろ）・大和（やまと）・河内（かわち）・和泉（いずみ）・摂津（せっつ）——を経て東海道の伝わってゆき、さらに木曾路から南信、北信の地方に伝わり、東北、北陸に沿ってひろげられ、西北に向っては山陰地方にも次第にのびていったものであろう。しかし、九州地方や東北、北海道のそばが、どんな経路で伝わってきたのか、詳しいことになるとまったく不明である。

『蕎麦史考』（昭和五〇年発行）の著者である新島繁氏によると、日本には、「蕎麦粒山（つぶやま）」と称する山が四つもあるそうである。

まず、静岡県榛原（はいばら）（郡中川根町と周智郡春野町の北境にある蕎麦粒山が標高一六二七メートルで一番高く、二番目は東京の多摩川の支流日原川の奥の日原）（にっぽら）から埼玉県秩父郡の浦山に通じる仙元峠に連なる蕎麦粒山で標高一四七三メートル、三番目は岐阜県揖斐（いび）（郡徳山・坂内村境の蕎麦粒山で標高一二七メートル、一番低いのは長野県北安曇（きたあづみ）郡白馬・美麻（みあさ）村と上水内（かみみのち）郡小川村の境にある標高一〇六五メートルの蕎麦粒山だ。

このほか、岐阜県吉城（よしき）（郡宮川村には「蕎麦角山（かくやま）」＝標高一二二二メートル、山口市には「蕎麦ヶ岳（だけ）」＝標高五五七メートル、さらに岐阜県奥揖斐連山の中央には、「そむぎ山」というのがあるそうである。また、東京の小石川諏訪町の「蕎麦切横町」、本郷二丁目東の「蕎麦金横町」、さらに神田のお玉が池の二八横町ならぬ「二六横町」などは、いずれも、むかし蕎麦屋のあった跡だということである。さらに、いろいろな「蕎麦にちなむ地名」も多く、蕎麦生（そばむぎのう）・蕎麦原（そばはら）・蕎麦原村（そばはらむら）・蕎麦城（そばはらじょう）・蕎麦道（そばはらみち）・蕎麦原通（そばはらとおりぐち）・蕎麦原（そばがわ）・蕎麦山（そばやま）・蕎麦塚（そばづか）・ソバハナシ・そば谷（たに）・蕎麦沢（そばざわ）・蕎麦地（そばぢ）・蕎麦目村（そばめむら）・北蕎麦目（きたそばめ）・蕎麦畑（そばはたけ）など。調べればまだまだこのような地名があるのであろう。

### 三 そばのヨーロッパ諸国およびアメリカへの伝播

そばが、ヨーロッパに伝播したのは、中世紀にダッタンおよびソ連邦を通じて一般に達したものと考えられているようである。川島四郎氏によると、「サラセン人がそばをヨーロッパに伝えたものとされているが、確実なところでは八五〇年前、七回にわたって遠征した十字軍の兵士達が携え帰って

ヨーロッパに伝播したのであると記録がある」(新島繁編『蕎麦今昔集』・昭和四六年刊による)というから、十二世紀の初めということになる。

ベッケル Becker 氏(一九二七年)によると、ギリシア、ローマ時代にそばの存在を認めるに足る資料はなく、一三九六年のドイツのニールンベルグ(Numberger)記述中に見るのが最初の記録であるといふ。

また、プリツヘル Pitzel 氏(一八六六年)によると、ドイツにおいてはそばを植えることは一四三六年のメックレンブルク(Mecklenburg)記録中に初めて見るといふ。したがって、ドイツには十四、十五世紀にトルコを通じて伝わったものであり、十六世紀には、広く、ベルギー、フランス、イタリアの各地に伝わり、その後、イギリスにおいてもそばを作るようになったといふ。

とくにフランスにおいては、ルエリウス Ruellius 氏(一五六〇年)およびジャン・ブーヒー Champier 氏(一五三〇年)は、ともにその著書中に「自分たちの祖父の時代に、ギリシアまたはアジアより渡米した白花紅茎のトルコ麦(ソバのこと)をフランスの畑で見ることができた」と書いているので、十五世紀の末にはフランスにそばがあったものと思われる。

アメリカには、ハッチソン Hutchesson 氏(一九二四年)によると、イギリスの植民地時代に伝わり、一六二六年にアメリカからオランダに送った植物標本の中にそばがあったと言われる。なお、ダットンソバのヨーロッパへの伝播は普通ソバより三、四世紀遅れたものと推定されているようである。

すなわち、ワイン Wein 氏(一九二五年)はシベリアより一九三四年に伝わったとし、ベッケル Becker 氏(一九二七年)はダットンソバはシベリアからライプツヒの植物園には一七三五年、レニングラードの植物園にはその翌年に送られ、一般に栽培化されたのは一七五三年以降であるといふ。

以上のそばの伝播経路について、一括して図示したものを上にかかげておくことにしよう。

さて、人間はかつて「猿」であった時代から、現代まで毎日食べつづけてきたわけであるが、農耕文化の伝承の歴史はそのまま人類進化の歴史につながっているともいえよう。すなわち、「The first farmer was the first man」とい言葉がある。つまり、人類は一〇〇パーセントの野生動物依存から脱却して、自分たちに必要な衣食住の材料を「農業」によって作り出すのであるが、未開時代にはまだ「産業」の分化はなく、誰もが自給自足のいわゆる「原始農業」を営んできたわけである。

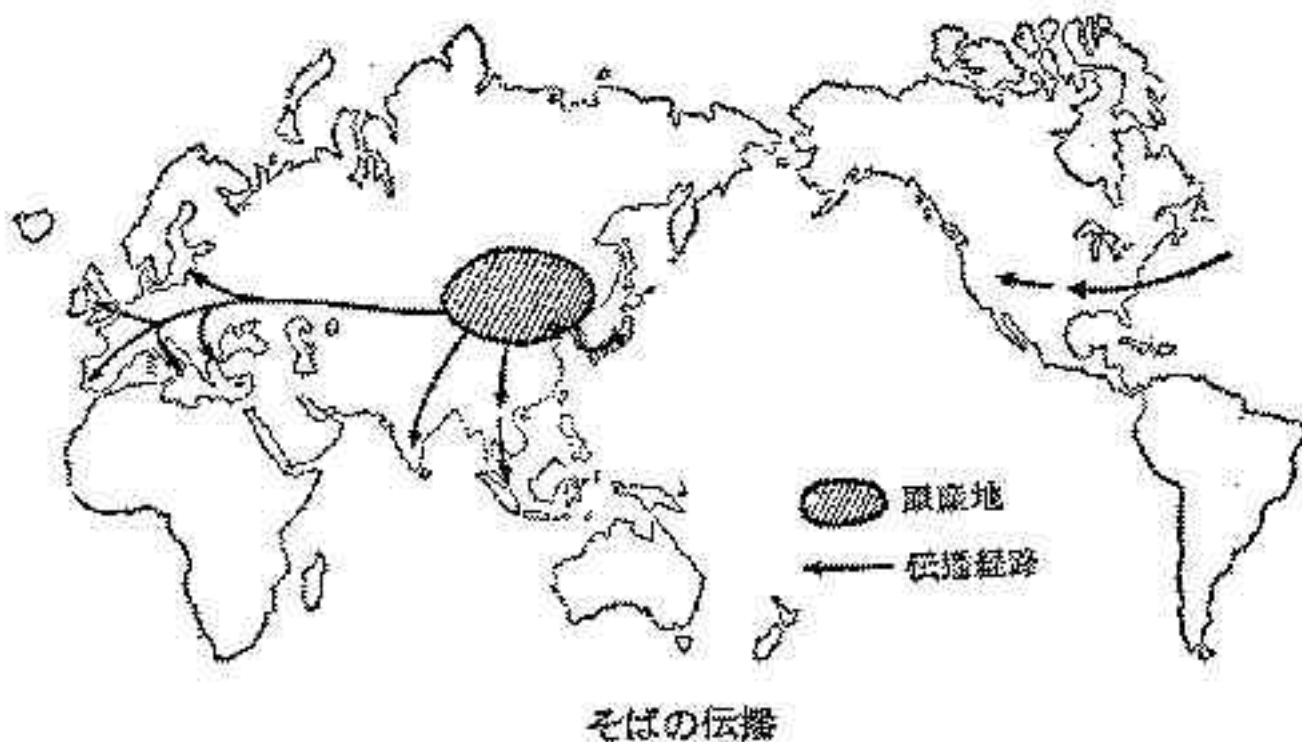
そして、ノマデン氏の仮説によると、「農業は墓場より起り女によって始められた」というのである。その場所とはかく、時期は、少なくとも今から二、三〇〇〇年以上の過去のことであろうといふ。すなわち、ノマデン氏の仮説の要点は、夫婦があつて、男が女よりも先きに亡くなり、土葬では死体をそのまま土中に葬るのが普通である。すると死骸の上に軟らかい土が盛られ、いわゆる立地条件ができる(土中の死骸は肥料になる)。

そして、ある日、婦人は自分の主人が生前にとても好物としていた何かの木の实(草の实でもよい)を墓前に供える。すると、お供え物の実(そのなかの種子)から新しい芽が出て、やがてすくすくと成長して行くことがあり得るといふわけである。そこでたまたま、ある日のこと、彼女がその植物のすばらしく見事に開花結実しているところを見て、ひじょうに驚き、いや発見して、ここにはじめて人類が野生植物を植えて育てることを知る、という筋書きになっている。

(古生人類——化石人類ともいふ——が、はじめて「アウストラロピテクス類」として地質時代の末期に出現したのは約二〇〇万年も前のことである。ついで猿人(えんじん)とも言われる「ピテカントロプス類」が四五万年前、さらに原人、つまり原始人類と言われる「ネアンデルタール人類」が一五万年前(日本における明石市の明石原人・栃木県の葛生(くずう)原人・豊橋市の牛川原人の化石骨もこの類である)、そして化石真正人として現代人とほとんど人類学的に相違のない「ホモ・サピエンス」が現われたのが四万年前で、これが人類の直接の祖先だとされているのである)

新石器時代に入ると、牧畜と農業がはじまり、遊動生活から安定生活となり、いわゆる人種分離の傾向が判然となり、固定化の方向に進んだのである。しかも気候のきびしい地方に住む人類の技術が進歩したのは、生存の必要にせまられたからで、自然条件にめぐまれた地域に住む人たちの進歩が遅れたのは、前者ほど生存への努力を必要としなかったからであろう。

さて、世界の農耕文化を大別するところの五つになるようである。



(1) 根栽農耕文化

東南アジアのバナナから始まった農業である。バナナははじめマレー半島付近のものが、その後、メラネシア・ポリネシアの熱帯地域に伝播したようである。

バナナのほか、ヤムイモ・タロイイモ・サトウキビ・パンノキ・サゴヤシ・ニンニクなど。

東南アジア地域は、いわゆる「熱帯降雨林」と呼ばれる温度と湿度が過大にめぐまれたところである。植物の宝庫ともいえるだろう。

私は太平洋戦争のとき、マレー半島から南下し、ジャワ島、バリ島、ロンボック島、スンパワ島、そしてスンパ島と、数年間を転々として、それらの島々で生活した。

とくに、赤道を越えて南緯一三度のスンパ島では、二年間も食糧は島民とほとんど変らぬ生活だった。しかしこの島には、ピサン Pisang = バナナ(いろいろな種類のものがあつた。種子のないもの、あるもの。大きくて長いもの、短くて丸いもの。白いもの、帯紫色のもの、帯青色のもの、など)、

ウビ ubi = ヤムイモ (野生のもの)、ウモカウ ubikayu = タビオカイモ、ブアケラバ buahkelapa = ヤシの実などが豊富にあったので、毎日の食糧にはこと欠かなかったのである。

島民の農法は一種の「焼畑法」であった。すなわち、畑(ケボン(Kebun))にするには、草(ルムプツ(rumput))に火(マピ api)をつけて焼き払い、唯一の農具である木の棒(バタン(batang))を使って掘り起こし(カルジャ kardia)、トウモロコシ(ジャモン diagong)を一カ所に(サ・カリ satu kali)一、三粒(シア・アウ・ティガ dua atau tiga)点々と植える(ターナム tanam)のである。もちろん、肥料はやらない。島民からは最後まで「肥料」という言葉さえ私は聞き出せなかった。この島ではまだ肥料をやることを知らないようである。一回目に植えるとき、ちゅうと前の作物の根元に植えるのである。理由をたずねると「サマサン Sama Sama」と言っ。前の場所なら「同様」のあるいは「似た」生育が得られると言っているのである。これでは「肥料の原理」をいくら説いても無駄だったのである。いや、「熱帯降雨林地帯」という驚くべき、植物にとってははめくまれたところである、といいなおさなければならぬ。

後に、草が生えてくるけれども、すでにトウモロコシが伸びていて、草は一度火で焼かれたため、生育のスタートが遅れていて、トウモロコシに追いつけないのである。もちろん、除草もしない。トウモロコシは雨期にはどこでもよく採れるが、乾期でも川沿いや水のある場所ならよく生育し、一年に、同じ土地で連続三回も採ることができるのである。ああ、スンバ島よ。

余談だが、この島はあの香気の高い心材を生産する半寄生常緑高木のいわゆる「白檀(びやくだん)」の島だったのである。しかしこの木を島民は血の木(カユダー kaju darah)と呼び、つまり、この島ではこの木を伐ることは言つに及ばず、この木に触れることすら禁じられていて、いわゆる「血の出る」恐ろしい(っ)木だった。だから、この木に関することをいくら訊いても「ティダバグス tidak bagus」(イケマセン)という返答しか得られなかったのである。

また、インドネシア語は名詞を並べるだけでもよく相手に通じた。ぶつ、後の名詞が形容する語になるのである。「カユは木で、ダーラが血、カユダーはつまり血の木」となるのである。「カチャ kafia」はガラスで、「マタ mata」は眼、カチャマタは「眼のガラス」、つまり、眼鏡となる。マタハリ matahari は「日の眼」、つまり、太陽で、アエルマタ air mata は「眼の水」、つまり涙である。

しかし、はじめの頃は相手に通じない言葉も多かったのである。インドネシア語の「飼牛」は「サピ sapi」であるが、牛はこの島には一頭もいなくて、半野生の水牛ばかりだった。

「水牛」というインドネシア語を知らないまま日本流に、「水の中の牛」、つまり水は「アエル」だから「サピアエル」、つまり「サピアエル」……といくら大きな声で言っても、相手に通じないのだ。ついに、着物をぬいで水の中で体を横に伏し、両手を頭の上にあげて曲げ、牛の恰好で、「モーウ」、「モーウ」、「モーウ」と牛になったつもりでいっしょうけんめい鳴くしぐさをしてみたが、矢張りどうしても通じなかった。

あとになってわかったのだが、「水牛」は「ケルボー kerbau」と言えば、すぐに相手に通じたのに……。この島では魚は「イカン ikan」、飯は「ナン nasi」、空腹は「ラパル lapar」、菓子(クエ kue)は「スス susu」、苦しい(シムヤイ)は「スサ susah」、むねぶりは「ブンロ mankuk」、むねも、ありがとうございました「トリマカーシ terima kasih」……。

## (2) 地中海農耕文化

西アジアのチグリス、ユーフラテス川の豊かな半月弧(はんげつこ)に起った農業である。冬に雨が多いが寒くなく、夏は乾燥した気温の高い気候でいわゆる「地中海一年生植物気候」とも言われる。主作物は、コムギ・オオムギ・ライムギ・エンバクなどのムギ類であるが、エンドウ・ソラマメ・ダイコン・カブラ・ハクサイ・ホウレンソウなどもこの地域の作物である。

現在でも、この地域には野生のムギ類が見られるわけであるが、ムギ畑の雑草集団のなかからいろいろな、いわゆる「二次作物」——セカンダリー・クローブという——が出現したのは、地中海農耕文化の特色であると考えられている。例えば、ムギ畑の雑草から二次的に栽培植物に昇格したものである。例としてナタネ類やアカザ類などがあり、エンバクやライムギもここでは典型的な二次作物なのである。

## (3) サバンナ農耕文化

シコクビエ、ヒエ、アワ、キビなどの雑穀を主とした農耕文化で、アフリカのニゼル川流域やエチオピアを中心とした広い地域である。

雑穀は粒は小さいが、輸送や貯蔵には便利な食糧である。これにサザゲやインゲンのようなマメ類を加え、ウリ類、ナス、オクラなどの果菜類が開発され、さらにゴマや油ヤシ、ベニバナなどの油料作物を栽培して栄養的にバランスのとれた食糧作物をつくりあげたわけである。

そして、栽培植物のすべてが夏作物であるのと、イモ類のないことが、このサバンナ農耕文化の特色なのである。しかし、農業の後進性という点では根栽農耕文化によく似ている。

また、イネは湿地における雑穀として、サバンナ農耕文化の周辺、すなわち、西アフリカの湿地とインドの東部で開発されたものである。

## (4) 新大陸農耕文化

南北アメリカの新大陸の農耕文化は旧大陸のそれとは独立的に発生したものである。

カリブ海近郊のキャッサバ、メキシコ付近のサツマイモ、アンデス高地のジャガイモを中心とした三つの代表的なイモ類をはじめ、トウモロコシ、カボチャ、トマト、ラッカセイ、トウガラシ、ヒマワリなどである。新大陸の農耕文化は歴史が浅いために旧大陸の根栽農耕文化とサバンナ農耕文化の複合型としても急速な展開を独立にたどったものといえよう。

## (5) 照葉樹林農耕文化

西はヒマラヤ南面の中腹から、中国南部を経て、東は日本列島の南半島にわたる地域である。言わば、帯状に分布する<温帯性森林>で、カシ・シイ・クス・イヌグスなどのいわゆる常緑性樹木が繁茂している山岳地帯である。ここで、食用となるの植物はドングリ類のほか、ワラビ・クス・マムシグサ・ヒガンバナ・シン・茶・柑橘など。これらの中には、渋味や毒性のあるものも含まれ、水晒(さら)し法や乾燥法などの加工技術が開発されているのである。

このように、照葉樹林農耕文化の東端にある日本は、熱帯降雨林地域の根栽農耕文化からは一部の作物——サトイモやナガイモなど——をうけとり、ムギや雑穀類を栽培する農業は地中海農耕文化やサバンナ農耕文化を吸収し、最後に新大陸の農耕文化が伝来したということになる。

終りに、大阪府立大学農学部の中尾佐助教授は『栽培植物と農耕の起源』（昭和四一年第一刷）のなかで、アジアにおいては地中海農耕文化とサバンナ農耕文化が重複して西から東へ伝わったとき、多くの伝番ルートが中国南部の雲南（ゆんなん）地方に集まり、第二次的に中心地となった、いわゆる「ロロセンター Lolo center」を認めているのである。

多くの伝番アーケのなかで、同氏によると、チベットアーケ（ダツタンソバ）・ヒマラヤアーケ（普通ソバ・ダツタンソバ）・モンゴルアーケ（普通ソバ・ダツタンソバ）・ヤンツァーアーケ（普通ソバ）の四つのアーケに、ソバが見出されることを指摘している。

したがって、その時期は不明としても、日本へのそばの伝番経路としては、陸路ならば、もちろん朝鮮を経て、海路ならば、まず九州の西南海岸を経て日本列島に伝来したという推測もできるのではあるまいか。